

# セタシジミD型仔貝の高密度量産技術の開発

井戸本 純一

## ◆背景・目的

セタシジミ放流種苗の生産量は、おもに採卵孵化に用いるFRP水槽の底面積の総和によって制限されている。施設を拡大することなく放流種苗の増産をはかるため、昨年度有効性が認められた立体網状マットを用いて、採卵槽1台あたりのD型仔貝生産量を倍増させることをめざす。

## ◆成果の内容・特徴

- 採卵槽（底面積1.5㎡）の底に、ポリプロピレンの線条を立体網状に成型したマット（長さ1.8m×幅0.5m×厚さ0.1m）2枚を屋根型に敷設した。
- 2005年6月24日および7月1日の採卵において、採卵槽1台あたりのD型仔貝生産量は従来型が平均503万個（平均生残率54%）であったのに対して、改良型は平均658万個（平均生残率72%）となり、歩留まりの向上効果が認められた。
- 7月14日の採卵では、採卵槽収容前に親貝を水道水で蓄養することにより、4.7kgの親貝から1,087万個のD型仔貝を生産することができた。
- 単位親貝あたりの採卵量が過去の実績にくらべて半減しており、採卵槽1台あたりの生産量を過去の実績より倍増させるには至らなかった。

## ◆成果の活用・留意点

- この技術を有効に活用するには、単位親貝あたりの採卵量を向上させるための親貝養成技術および親貝に由来する採卵槽の汚染を軽減するための親貝浄化技術を早急に確立する必要がある。



図1 採卵槽に敷設したマットと卵の付着状況。マットの素材は直径約1.5mmのポリプロピレン線。

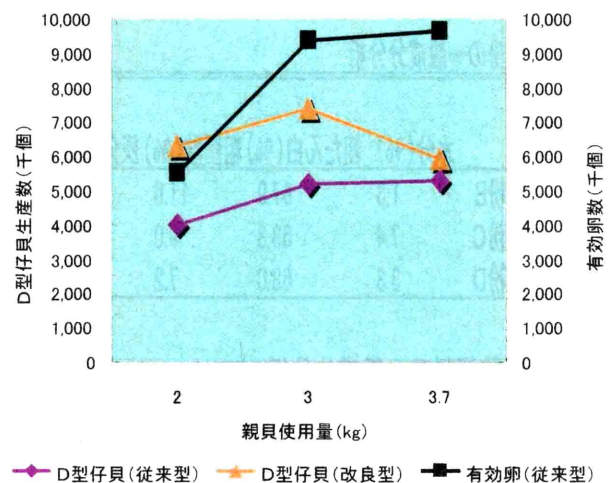


図2 従来型と改良型採卵槽におけるD型仔貝生産量の比較(2005年6月24日採卵)。